

Aichi University

Lingua



INSTITUTE FOR LANGUAGE EDUCATION, AICHI UNIVERSITY
No.20 December 2022



Calm Downが収録されたRemaのデビューアルバムRave & Rosesのジャケット。
6LACKやクリス・ブラウンなども参加(日本ではVmlasから2022年5月20日発売)

CONTENTS

<特集> 世界の音楽と楽器

・ アフリカ	Rema が表現する若い世代の日常 — ナイジェリア系ポップミュージックの世界への広がり — 国際コミュニケーション学部 友松 夕香 …… 2 ~ 3
・ ドイツ	マックス・ラーベとパラストオーケストラ — 現代に生きる20世紀ドイツ大衆歌謡 — 国際コミュニケーション学部 吉本 篤子 …… 4 ~ 5
・ ドイツ	ドイツ、クラシック音楽、女性の作曲家たち — ファニー・ヘンゼル、クララ・シューマン、エミーリエ・マイヤー — 文学部 鈴木 康志 …… 6 ~ 7
・ フランス・ドイツ・オーストリア	これまでに聴いたドイツ語とフランス語の歌曲 文学部 三野 豊浩 …… 8 ~ 9
・ オーストリア	現代音楽を始めたシェーンベルク 非常勤講師 河津 邦喜 …… 9 ~ 10
・ 東アジア	J ポップ、C ポップ、K ポップの起源 全日本フォークジャンボリー 現代中国学部 藤森 猛 …… 11 ~ 13
・ 日本	音を楽しむ環境 — 日本の学校の音楽教育 — 経営学部 山川 法子 …… 14 ~ 15
・ 日本	浜松 楽器博物館 現代中国学部 三好 章 …… 16 ~ 17
名古屋語学教育研究室より	…………… 18
<豊橋キャンパス> Toyohashi Language Center	…………… 19
2022年度外国語検定試験奨励金のご案内・編集後記	…………… 20



世界の音楽と楽器

Remaが表現する 若い世代の日常

—ナイジェリア系ポップミュージックの世界への広がり—

国際コミュニケーション学部 友松 夕香



2022年8月、アフリカ中東部に位置するブルンジ共和国。私はコーヒー産地のンゴジで調査を終え、乗り合いバンでタンガニカ湖に面したブジュンブラまで戻っていた。山道を軽快に走る車内では、ポップミュージックが流されている。ブルンジに来て以来、街中でよく耳にしてきた楽曲になった。上り下りが続く道に、リズムがぴったり合っていて心地よい。誰が歌っているのだろう。あとで尋ねてみようと思い、録音した。



REMA (2000-)

Virgin Music Label & Artist Service より

ブジュンブラに到着した午後、お世話になっている方々と一緒に炭焼き肉を食べに出かけた。街ではいたるところに野外のバーがあり、新鮮なヤギ肉や牛肉、鶏肉がその場で調理されているのだ。大量飼育された日本の家畜肉とは異なり、味が濃くてとても美味しい。薄くスライスした玉ねぎと一緒に、レモンをたっぷり絞っていただくのがブルンジ流だ。座った席の横に、ちょうどDJブースがあった。ここから音楽が流されている。DJの若い男の子たちに乗り合いバンで録音した音楽を聴いてもらった。アーティストはRema、曲名はCalm Downだという。Remaはどこの国の人なのかと尋ねると、ブルンジでもアフリカ中東部の近隣諸国でもなく、西アフリカのナイジェリアのアーティストだった。

ひと昔前まで、アフリカ大陸で流行するポップミュージックは地域ごとにかなり分かれていた。たとえば、2003～2005年、JICA協力隊員として過ごした西アフリカのブルキナファソでは、コートジボワールやギニア、マリ、セネガル、コンゴなど近隣のフランス語圏のポップミュージックが流れていた。2009～2011年、大学院時代に長期調査をした旧英領のガーナ北部では地域言語の影響が強く、英語より現地のダゴンバ語やマンプリシ語で歌うアーティストの音楽が流行っていた。こうした経験から、アフリカ中東部に位置する旧ベルギー領フランス語圏のブルンジで、遠く離れた西アフリカのナイジェリアのアーティストが英語で歌う音楽が流行していたことは、とても意外だった。

RemaのCalm DownをYouTubeで検索すると、

なんと「世界で人気27位のミュージックビデオ」としてランクインしていた。世界人口でアフリカ大陸の若者人口が占める割合は高いが、彼らだけではCalm Downの再生回数をそこまで押し上げることはできない。誰もがスマホを持ち、YouTubeで日常的に音楽を視聴できるほど稼ぎを得ているわけではないからだ。そんなとき、ちょうどジャマイカに帰国後、米国で親戚を訪問中だったデラス先生とやりとりをした。Calm Downが流れているか聞いてみると、ジャマイカはもちろん米国でも大人気だという。Calm Downがリリースされたのは今年2022年の2月である。ほんの半年足らずで、デジタル空間をとおして米国まで広がっていたのだ。これまで、アフリカ諸国の音楽は、たとえ欧米で注目されても「ワールドミュージック」のカテゴリーから抜け出すことはなかった。それを考えると、大衆によるRemaの人気ぶりは新しい現象である。

Remaの楽曲からは、アフリカ大陸で流行するポップミュージックの変化も読み取れる。以前であれば、アフリカの主体性や反権力・反政権を主張する政治色が強いもの、伝統的音楽の要素を中心に据えたもの、文化的価値観を表現するものが流行っていた。きらびやかな生活を描き、派手なダンスパフォーマンスを取り入れたクラブ系ミュージックは今も人気だ。しかし、これらと比べると、現在21歳のRemaの楽曲は、歌詞もビデオ内容もとても軽やかで素朴だ。そこでは、ごく一般の若い世代の生活、感覚、テイストの日常的なイメージが表現されている。

Remaを含むナイジェリア系の現代ポップミュージックは、世界の音楽業界で“Afrobeats”として知られている。ただし、Remaは自らの音楽を“Afro-Rave”と呼ぶ。ナイジェリアのピジン英語で歌っていることから、アフリカ「現地」のポップミュージックを世界に広げようとする意気込みを感じる。しかし、Remaの楽曲

が「アフリカ」を越え、カリブ海や米国のメインストリームの若い世代の間でも人気になっているのには、国籍にかかわらず、現代の若い世代が共有する価値観の素朴な側面を表現できているからのようにも思う。Remaは、グローバル化したデジタル空間で若い世代の世界観を感じ取り、どこか普遍的に描くことに成功しているのだ。

ところで、ブルンジから帰国する日、お土産を買いにアート工房に立ち寄った。入ったお店で、笑顔が素敵な女の子が話しかけてきた。市内の大学生だが、長期休暇の間、販売のバイトをしているという。日本人だと自己紹介した私に対し、「私、韓国語なら少し知ってます。どんな意味か分からないけど」と韓国語らしい言葉を話してきた。好きなK-POPの楽曲の一部だという。アーティスト名を教えてくれたが、K-POPをほとんど知らない私にはまったくわからない。デジタル時代の到来で、音楽は国民というよりむしろ、国境のみならず言語の壁を越え、若い世代をつなぐものになってきているようだ。



マックス・ラーベと パラスト・オーケストラ ——現代に生きる 20世紀ドイツ大衆歌謡——

国際コミュニケーション学部 吉本 篤子

ドイツやオーストリアの文化や芸術が日本で紹介されることは、アメリカやイギリスなど英語圏の国と比べるとかなり少ないですが、音楽の場合も、愛好家の多いクラシック音楽は別にして、大衆的な歌謡曲についてとなるとさらに知る機会は少ないでしょう。過去には女優マレーネ・ディートリヒも歌った「リリー・マルレーン」(Lili Marleen) やウド・ユルゲンスの「別れの朝」(Was ich dir sagen will——私のカラオケ定番曲です) など、単発的に日本で紹介されヒットした曲もありましたが、特定の歌手やジャンルが日本の多くの聴衆に親しまれる機会はあまりなかったように思います。

近年はインターネットのおかげで、前世紀よりずっと手軽に外国の音楽を聞けるようになりました。動画サイトなどで聞くことのできるドイツ音楽のなかから、今回は、ドイツの大衆歌謡の歌手マックス・ラーベ (Max Raabe, 1962-)

とパラスト・オーケストラ (Palast Orchester) の曲をご紹介します。

ベルリンの音楽大学で声楽を学んでいたラーベは、1986年に大学の仲間とともにパラスト(宮殿)・オーケストラを結成し、ドイツの1920年代から30年代の流行歌やキャバレーソングを中心に歌ってきました。蝶ネクタイにタキシード、またはスーツを着用し、体の動きは少なく、その代わりに顔の表情ゆたかに歌うスタイルで演奏します。俳優のイッセー尾形らが企画したことを機に、2000年代に来日コンサートが実現し、日本でもラーベとパラスト・オーケストラの活動が知られるようになりました。

1920, 30年代のドイツ、ワイマール共和国は経済的、政治的に厳しい時代を迎えていたものの、文化的にはめざましい発展をとげていました。とくに当時、世界的大都市だったベルリンで20世紀初頭に生まれたキャバレー(ドイツ語ではカバレット Kabarett)では、流行歌や最先端の音楽、寸劇、詩の朗読などの大衆的な娯楽がさかんになり、夜ごとに多様なショー芸術が行われました。キャバレーは、従来の伝統的芸術や民衆娯楽に飽き足りなくなっていた当時の大都市住民に多様なジャンルの芸術を提供する場として受け入れられるようになりました。キャバレーで催された芸術活動の多くは、のちにナチスによって「退廃芸術」と攻撃されて文化的には力を失っていましたが、戦後、キャバレーはある程度活気を取り戻します。ラーベとパラスト・オーケストラが手がけるのは、それらの音楽芸術のうち、どちらかといえば華やかで多くの大衆に親しまれる恋愛の流行歌や映画音楽などが多いように思います。

ラーベとパラスト・オーケストラの演奏曲のなかから、いくつか私のお気に入りの曲を紹介しましょう。まずは、20, 30年代の流行作曲家ヴェルナー・リヒャルト・ハイマン (Werner Richard Heymann, 1896-1961) の Irgendwo auf der Welt (世界のどこかで、1932年)です。ユダヤ系



ラーベの作品、いろいろなテーマのCDがあります

ドイツ人のハイマンは、当時黄金時代を迎えた映画芸術の曲を多数手がけ、映画「会議は踊る」の作曲者としても知られています。Irgendwo, auf der Welt, gibt's ein kleines bisschen Glück...から始まるこの曲は、世界のどこかにある少しの幸せを見つけないかという願いを歌った、優しい気持ちになれる曲です。ラーベの歌は、当時この曲を歌った国際的コーラスグループのコメディアン・ハーモニスト (Comedian Harmonists) の演奏よりもゆっくりしたテンポで、より懐かしさを誘うように感じられます。

ラーベは20, 30年代の流行歌を中心に歌ってきましたが、オリジナルの現代的な曲も手がけ、他ジャンルの歌手とのコラボレーションにも取り組んでいます。ラーベは古い歌謡曲については昔からの歌い方を比較的忠実に守っているようにみえますが、現代的な曲は、親しみやすい題材で歌い方も現代風でより軽やかになっており、ドイツ語を学ぶ学生のみならずにも聞き取りやすいと思います。

現代的な曲もご紹介しましょう。まずはDer perfekte Moment...wird heut verpennt (今日は最高のごろごろ日和、と訳したいところです)、ラーベひとりで歌うものもありますが、ハンブルクを中心に活動するラップ歌手サミー・デラックス (Samy Deluxe) と共演したヴァージョンもおすすめです。Heut' mach' ich gar nichts...から始まるこの曲は、何もしない一日は最高!と歌っています。20世紀に生まれた比較的新しい音楽ジャンルであるラップと20世紀初頭の歌謡曲を演奏するパラスト・オーケストラの音楽を融合させた楽しい曲だと感じます。また、Fahrrad fahr'n (自転車に乗って) という曲は、自転車で楽しく町を駆け抜ける様子が思い浮かぶような曲調で、幼い頃から自転車でも歌っていたというラーベの自転車好きが伝わってくるような曲です。

またラーベは、日本でも評判を呼んだ、ベルリンを舞台にナチスが台頭する時代を描いたド

ラマ「バビロン・ベルリン」(Babylon Berlin) の最新(第4)シリーズの主題歌も手がけています。1920, 30年代の大衆歌謡をベースにしながらも現代の要素を取り入れた音楽を見せてくれるマックス・ラーベとパラスト・オーケストラは、今も活躍の幅を広げています。

ここで紹介した曲のほかにも、ラーベとパラスト・オーケストラのYouTubeチャンネルをはじめ、オンラインで彼らの多様な曲を楽しむことができます。名古屋情報メディアセンターにもCD・DVDがあるので、ぜひ聴いてみてください。

参考資料

- ・Max Raabe & Palast Orchester (YouTube チャンネル)
<https://www.youtube.com/channel/UCXh3cIvGrgFnYYDV4Bzru0Q/videos>
- ・ハインツ・グロイル著、平井正・田辺秀樹訳『キャバレーの文化史1 道化・風刺・シャンソン』ありな書房、1983年
- ・ウォルター・ラカー著、脇圭平・八田恭昌・初宿正典訳『ワイマル文化を生きた人びと』ミネルヴァ書房、1980年
- ・「ドイツ歌謡界の貴公子マックス・ラーベ氏にインタビュー」
<http://www.newsdigest.de/newsde/features/252-max-raabe-interview/>
- ・「Für Frauen ist das kein Problem」(名古屋情報メディアセンター所蔵 請求番号 R76:F92)



ドイツ、クラシック音楽、 女性の作曲家たち ——ファニー・ヘンゼル、クララ・ シューマン、エミーリエ・マイヤー——

文学部 鈴木 康志

仕事上、最近裁判を傍聴する機会がありました。法曹界においてはすでに当たりまえなのかもしれませんが、裁判長も検事も女性で少し驚きました。ジェンダー平等が遅れていると言われる日本ですが、多少進歩している分野もあるのではないのでしょうか。

さて、ドイツと言えば、まずクラシック音楽、バッハ、ハイドン、モーツァルト、ベートーベン、シューベルト、シューマン、メンデルスゾーン、ブラームス、ワーグナー、マーラー、ブルックナー、シュトラウス、シェーンベルク等々思い浮かべるだけでも切りがありません。その肖像画が、小学校や中学校の音楽室の壁を飾っていたドイツの作曲家たちです。しかしこれらの作曲家はすべて男性です。クラシック音楽の国ドイツに女性の作曲家はいないのでしょうか？ クラシック音楽に詳しい方であればファニー・メンデルスゾーン＝ヘンゼル（以下ファニー）、クララ・シューマン、あるいは

アルマ・マーラーを思い浮かべるかもしれませんが。しかし彼女たちは作曲家としてよりは、作曲家フェーリクス・メンデルスゾーンの姉、作曲家ローベルト・シューマン、グスタフ・マーラーの妻としての方が有名です。しかしファニーは、弟フェーリクス以上に才気あふれる女性で、フェーリクスの名で出された「無言歌」の幾つかはファニーの作曲であったようです。ただ、女性であったがゆえに、芸術家より、女性として生きるように父から諭され、そして父の死後は弟フェーリクスから作曲家への道は押さえつけられます。しかし画家の夫ヴィルヘルム・ヘンゼルとのイタリア滞在の後、弟のしぶしぶの了解を得、作曲家への道を歩もうとしていた、まさにそのとき脳卒中で亡くなってしまいます。42歳にも満たない人生でした。歴史にifはないかもしれませんが、あまりに突然の死で、生きていれば素晴らしい作品をもっと多く残したのではないかと思います。なお、敬愛する姉の突然の死はフェーリクスにとっても大きなショックで、フェーリクス自身も同年に亡くなってしまいます。天才モーツァルトの再来と言われたフェーリクス・メンデルスゾーンもモーツァルト同様30歳代で亡くなってしまいます。

さて、クララ・シューマンは音楽教育家の父ヴィークからピアニストとしての徹底した英才教育を受け、19世紀の最も有名なピアニストの一人になり、作曲も手がけました。1800年



ファニー・ヘンゼル
(1805-1847)



クララ・シューマン
(1819-1896)



エミーリエ・マイヤー
(1812-1883)

代の前半ヴィーク家には、ほぼ同年のメンデルスゾーン、シューマン、ショパンなどロマン派の面々が集いました。なかでも父親ヴィークの反対を乗り越えたクララ・ヴィークとローベルト・シューマンの結婚はロマン派を象徴する出来事でした。しかし8人の子供を抱えたクララは、シューマンの死後、ブラームスの援助を受けながらも、家計のため演奏家としてコンサートに明け暮れなければなりませんでした。ここがファニーとの違いですが、やはり作曲には専念できませんでした。でも素敵なピアノ曲を残しています。

ところでみなさんは、女性ベートーベンと呼ばれたエミーリエ・マイヤー（1812-1883）という女性をご存じでしょうか。実は私も最近まで詳しくは知りませんでした、多分それは私だけではないと思います。例えばエヴァ・リーガ著『音楽史の中の女たち』（思索社）、小林緑編著『女性作曲家列伝』などでもマイヤーは女性作曲家として取りあげられていません。日本はもとより、ドイツですら忘れ去られていたわけです。しかし彼女は多くのヴァイオリンとチェロソナタをもつ9つの管弦四重奏曲や歌曲、コンチェルト含んだピアノ曲を作曲しています。これだけでもファニーやクララと同列に置かれるべき存在です。ところがマイヤーはそれだけではありません、「器楽の頂点として、まったく男性的とみなされ、ベートーベンの後継者においても、その独自の主観を表す巨人としてのジャンルである交響曲（FAZ, 21.05.2022, S.12より）」を8つも作曲しているのです。最近、入手可能なマイヤーのCDを購入して交響曲の1番から5番まで、ピアノ協奏曲、弦楽四重奏曲などを聴いてみましたが、聴きごたえのある素晴らしいものでした。なぜこれだけの音楽が1883年の彼女の死後すぐ忘れ去られたのでしょうか？ 一つにはマイヤーの音楽スタイルがモーツァルトなどの後継としてのロマン主義的擬古主義で、19世紀後半のリヒャルト・ワーグナーやその信望

者たちには古臭く感じられたことがあるようです。そして女性であったことも顧みられなかった大きな理由だったかもしれません。しかし今彼女の音楽がルネッサンスを迎えています。あのバッハですら一度は忘れ去られ、ファニーとフェーリクス・メンデルズゾーンによって再評価されたのです。日本でもマイヤーの交響曲が演奏される日がくるかもしれません。

19世紀ドイツの女性作曲家たちファニー・ヘンゼル、クララ・シューマン、エミーリエ・マイヤーは、女性であるがゆえに創作には制約を受けたり、忘れ去られたりしましたが、その中で素敵な曲を多く残しました。ジェンダーの視点から彼女たちの人生を見ることも興味深いですが、バッハ、ベートーベン、ブラームスといったあまりにドイツ的、あるいは男性的なクラシック音楽だけでなく、女性たちが作曲した曲に耳を傾けてみるのもいいと思います。

お勧めの参考文献

- 山下剛著『もう一人のメンデルスゾーン ファニー・メンデルスゾーン＝ヘンゼルの生涯』2010年 未知谷
荻谷由喜子著『クララ・シューマン』2019年 ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス

Barbara Beuys: Emilie Mayer Europas größte Komponistin. Eine Spurensuche. Weilerswist-Metternich 2021.

引用

- Jan Brachmann: Durchaus auch Symphonien. Der weibliche Beethoven: Barbara Beuys stellt die Komponistin Emilie Mayer vor. In: Frankfurter Allgemeine Zeitung 21.05.2022, S.12.



これまでに聴いたドイツ語 とフランス語の歌曲

文学部 三野 豊浩

愛大に奉職して以来一貫して中国語の科目を担当して来た私ですが、授業を離れた趣味の時間も中国語の歌を聴いているかという、そうでもありません(テレサ・テンの歌は好きです)。実はかつて音楽家を志していた時期があり、音大受験のための勉強をしたこともあります。結局受験はしなかったものの、この時期に学んだあれこれは今でも私の音楽理解の基礎を形成しています。そんなわけで、趣味で聴く音楽はむしろ西洋の古典音楽(クラシック)が主流。はた目には専門と趣味が分裂していると思われるかもしれませんが、やむを得ません。今回は、これまで聴いたことのあるドイツ語とフランス語の歌曲(主にピアノ伴奏付きのもの)について、気ままに書いてみたいと思います。

それでは、まずドイツ語の歌曲から。若い頃クラシック志向の強かった私は、学生の頃からドイツ・オーストリアの歌曲に親しんでいました。高校生の頃は器楽一辺倒で、モーツァルトやベートーベンのソナタを夢中で弾いていましたが、大学に入学した頃から、徐々にピアノ伴奏付きの歌曲に関心が移って行きました。モーツァルトなら「春へのあこがれ」、ベートーベンなら「アデライーデ」が好きです。とはいえドイツ語は学校できちんと学んだことがないので、文法はいまだによくわかりません。アイネクライネナハトムジークの意味がわかる程度でしょうか(笑)。単語なら辞書を引けばわかりますからね。

話を戻しましょう。そんな私ですが、学生時代はロマン派の音楽が好きで、もっぱらシューベルトやシューマンの歌曲に親しんでいまし

た。一番好きな作品をあげるとすれば、前者なら「冬の旅」、後者なら「詩人の恋」でしょうか。どちらも失恋した主人公の心の諸相をうたう連作歌曲で、思えば暗い学生時代でした(笑)。やや後では、これにブラームスが加わります。「日曜日」という歌は素朴な民謡風で、印象に残りますね。ブラームスにはこの他「マゲローネのロマンス」という大作があります。朗読と歌唱が交互に繰り返され、中世の騎士が冒険の末に美しいお姫様とめでたく結ばれるという、昔の少女マンガのようなお話が展開されます。

他には、バッハ、ハイドン、メンデルスゾーンなど。バッハはミサ、オラトリオ、受難曲、カンタータといった大規模な作品をたくさん残していますが、「アンナ・マグダレーナのためのクラヴィーア小曲集」に収録された小さな歌曲の中にも佳作があります。ハイドンの歌曲はややマイナーですが、旧オーストリア国歌「神よ皇帝を守りたまえ」はエリー・アメリングの歌で聴くと本当に美しい。メンデルスゾーンならやはり「歌の翼に」でしょう。比較的簡単な曲は、自分でピアノを弾きながらメロディーを口ずさんでみたりもします。ただ声楽をちゃんと学んだわけではないので、人前ではちょっと…。この他、フィッシャー・ディースカウが歌ったレーヴェのバラードのCDも持っていますが、あまり聴いていません。これはメロディーの美しいシューベルトなどと違って、ドイツ語がちゃんと理解できないと楽しめない音楽だと思います。今よりドイツ語がわかるようになれば、面白くなって来るのかも知れませんが。

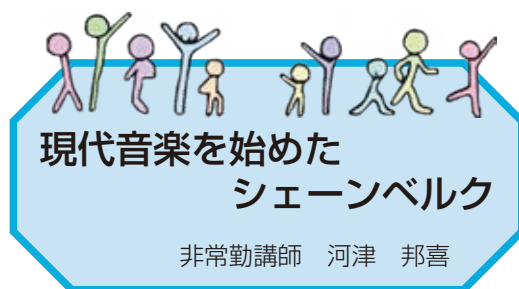
次に、フランス語の歌曲です。実は学生時代、第三外国語としてフランス語をほんの少しだけかじったことがあります。しかし名詞に男性女性の区別がある上に、活用が面倒、おまけに時制も複雑なため、早々と挫折してしまいました。何よりその頃は中国語の習得に必死だったので、「あぶはちとらず」になってはいけないという判断も働いたのでしょう。それでもその

後、「フランス語をもう少しちゃんとやっておけばよかった」という思いは、ずっと心の片隅に残り続けました。

ドイツ歌曲に比べると、フランス歌曲に目覚めたのはやや遅いです。最初にいいなと思ったのはフォーレの歌で、歌曲全集のレコードを買って来て、飽きもせず聴いていました。「夢のあとに」や「月の光」はとても美しいですね。他には、ドビュッシー、ラヴェル、プーランクなどの作品を聴いています。それぞれに面白いのですが、時代が進むにつれて音楽も複雑になり、時に私の理解を超えることもあります。他には、サティの「お前がほしい」。これはおなじみのポピュラー名曲ですね。CMで流れたりもします。

ドイツ語にせよフランス語にせよ、言葉がわからなくても音楽として楽しむことはできますが、やはりそれでは隔靴搔痒(かっかそうよう)という場合も多々あります。残りの人生の時間で、少しでも言葉への理解を深めることができればと思っています。

最後に一言。中国語は母音も子音もたくさんあり、中にはドイツ語のウムラウトのような音や、フランス語の鼻母音のような音も含まれています。ですから中国語をしっかりとやっておくと、他の語学にも応用できます(文法はともかく)。学生の皆さんも、中国語の発音をしっかりと練習してください。ということで、最後はうまく中国語に落ち着くことができました。



メシアン、プーレーズ、シュトックハウゼン、ノーノ。西洋クラシックの現代音楽家達です。80年代のポストモダン思想流行の後、日本の若者はみな大衆化して、「マンネリ化した文化」批判＝思想運動でもあった現代音楽も聴かなくなったと言われますが、如何でしょう？ 今回紹介する20世紀前半ウィーンの作曲家アーノルト・シェーンベルク 1874-1951 は、その運動の開祖様です。



アーノルト・シェーンベルク
(1874-1951)

総毛立つ瞬間って在りますね？ 授業で「エヴァンゲリオン」を見せたら、学生が「悪寒が背中を何度も走った」と感想を書いてました。「君って嫌いだな」「悪いけど貴方が嫌いなもの」といろんな人の声が出て、その声を聞く碇しんじ君は、「どうせみな決まっている世界だろ！」と悲鳴のように叫びます。音楽をそんなヒステリーの状態に置いたのが、シェーンベルクだと思えると良いでしょう。30分以上の器楽曲を聞くのは辛いけど、恐怖映画のBGMとしてなら最高です！

キューブリックの「スペースオデッセイ」に使われたリゲティの「アトモスフェール」の方

が凄い？ でも、シェフェールやヴァレーズのミュージックコンクレートと同じで、ああいうのは、「ゴゴゴ、ガガギー」を大音量で聞き続けることで意識の主体性の無いトランス状態になり、ストレスの溜まる浮世を忘れるって感じですね。シェーンベルクは、主体的意識が崩壊するギリギリの次元に留まります。両親や先生からは勉強しろ！と怒鳴られ、悪友たちからは勉強なんてダサいぜ！と誘惑され、又裂きにあつて、ついに「こん畜生！どいつもこいつも俺を苦しめやがって！」と惑乱状態になるようなもの。ワーグナー（「トリスタンとイゾルデ」）やリヒャルト・シュトラウス（「サロメ」「エレクトラ」）も、物語性たっぷりの愁嘆場を、調性の枠を緩めに緩めて音楽化しました。シェーンベルクはそれを押し進めて物語が狂気すれすれに陥る次元を、無調音楽へ突入することで追求しました（「月に憑かれたピエロ」「期待」など）。今日大学もサブカルチャーの講義に走るなど、文化の大衆化が進む一方ですが、19世紀末の一部「意識高い系」の人々は、大衆から己を差別化するために狂気を演じ、大衆の反感嫌悪をことさらに挑発する前衛芸術に走ったのです。

シェーンベルクは、ウィーンの裕福でないユダヤ人一家に生まれ、父が死んで一家を支えるために銀行に勤めますが、どうしても8歳から始めた作曲がしたくて、辞めてしまい、ほぼ独学でのし上がって行きます。ワーグナー、マーラー、R・シュトラウスら後期ロマン主義を受け継ぎ、「浄められた夜」「グレの歌」などロマンチックの極致である曲の後、調性の枠を弱めてゆく作曲法の流れを押し進めて無調音楽へ突入、さらに12音階技法を編み出します。今の若者が聴く大衆音楽は、西洋19世紀のクラシック音楽と同じぐらい調性をしっかり守る、耳に心地良い音楽ですから、無調音楽を聞いたら、騒音にしか聞こえないかもしれません。彼は後年、「美しい曲を書いていたあなたが、なぜ不協和音ばかりの曲ばかり書くようになったの

か？」と質問されて、「私だって美しい調性音楽を書きたかった。でも、西洋音楽の歴史がそれを許さないんだ」と憤然と答えたそうです。つまり、「これまでとは根本的に違うこと新しいことをせねばならぬ」という近代化の理念に余りに忠実でした。ライバルだった同時代のストラヴィンスキーの「春の祭典」に怒ったパリの聴衆が暴動まで起こしたことは有名ですが、シェーンベルクも、1907年の室内交響曲第1番の演奏で大スキャンダルを起こし、彼を擁護したマーラーは、椅子をガタガタいわせる聴衆に、静かに聴けと怒鳴りました。

ストラヴィンスキーは、カメレオン作曲家と呼ばれたぐらい、初期、原始主義、新古典主義、12音階技法、とそのスタイルを次々に変えたので、真摯さに欠ける小手先の技術屋と、意地悪評論家アドルノに批判されました。逆にシェーンベルクは、自分に課された問題に忠実でした。西欧音楽が進んできた方向を真面目に推し進めた積りなのに一般大衆から嫌悪されたという問題（「モーゼとアロン」に反映）以外にも、自分の妻が、自分を崇拝する若い画家に誘惑されて家出するという事件があります。この頃彼は、「表現主義」的絵画（人間の汚い部分を醜く描くもの）を描いて苦悩を克服しようとしてしました。彼の無調音楽の傑作「弦楽四重奏第2」も丁度この頃のものなのです。自身が狂気の淵にいたわけです。また、ナチズムのユダヤ人迫害に遭い、米国に逃亡します。ユダヤ教に改宗までして、自分の問題として担いました。戦後に、ポーランドの強制収容所からのユダヤ人生還者の語った記録を台本に、鬼気迫る「ワルシャワの生き残り」を作曲します。その後の現代音楽は、頭でっかちな知識人の独りよがり、と揶揄されがちですが、シェーンベルクにとっては切実な解答だったのです。

YouTubeで聞けます。現代音楽という異様な世界があったことに1度はショックを受ければ、自分の音楽世界が広がるかもしれません。



Jポップ、Cポップ、 Kポップの起源 全日本フォークジャンボリー

現代中国学部 藤森 猛

50th FOLK JAMBOREE

2019年9月1日、野外コンサート「第50回フォークジャンボリー」が岐阜県中津川市にある柵の湖（はなのこ）で行われた。フォークソング、ポップスにおいては伝説となった日本初の野外コンサート「全日本フォークジャンボリー」が半世紀を経て発祥の地に戻ってきた。出演者は、かつて日本のフォーク界を代表していた高石ともや、中川五郎、小室等、六文銭などの懐かしい顔ぶれ。私自身も小学校6年生の頃に戻って、高石ともやのヒット曲「受験生ブルース」を口ずさみながら、家族を連れて会場に向かった。

野外コンサートに行く時は、まず腹ごしらえとアウトドア装備の準備。JR中央線中津川駅近くの寿司屋「すし天」でマグロのにぎりを持ち帰り注文し、JR坂下駅近くの「喫茶ロッコ」で



第50回フォークジャンボリー (2019年)

美味しいシフォンケーキをテイクアウトで注文して、道の駅「きりら坂下」にある洋品店「すみれ」で長袖・長ズボン・帽子・ビニールシートなどの野外コンサートに必要なグッズを整えてから会場に入った。

会場の柵の湖は森と湖に囲まれた有名なキャンプ地。「ここで、50年前に日本のフォーク・ポップス界のアーティストが勢揃いして、オールナイトでコンサートを行って、2万人くらいの観客が集まったんだよ」と鼻高々と家族に説明をしながら、コンサート会場に入った。柵の湖を背にしたステージには「遠望楽観」、「フォークジャンボリー」の幟が揺れている。ステージの周りは草地にシートや椅子を持ち込んだ観客の人たちが、いっぱい。ステージ上にいるグループの名を聞いて、びっくり。80才の小室等の率いる「六文銭」。プログラムを見てもう一度びっくり。野外コンサートは午後2時から夜間にかけてのコンサートだと思っていたら、当日は昼の12時開演で今はフィナーレ前の六文銭の演奏。家族の白い目を感じながら、腕時計の時間はすでに終演の午後4時近かった。

1st ~ 3rd FOLK JAMBOREE

1969年8月9、10日、第1回の野外コンサート「全日本フォークジャンボリー」がこの柵の湖で開催され、第2回（1970年8月8、9日）、第3回



第50回フォークジャンボリー ポスター (2019年)



第50回フォークジャンボリー (2019年)
ステージ上 左から
及川恒平、四角佳子、小室等 (六文銭)



第3回フォークジャンボリー (1971年)
椈の湖キャンプ場事務所で

(1971年8月7～9日)も同地で開催され、フォーク、ポップスを中心としたアーティストが椈の湖に集まった。1969年は東大安田講堂事件が起き、学生運動、労働運動が急速に衰退した年で、日本のポップス界にも大きな変化が訪れた。

第1回～第3回フォークジャンボリーの主な参加者をみると、赤い鳥、あがた森魚、浅川マキ、五つの赤い風船、五輪真弓、岩井宏、遠藤賢司、岡林信康、小野和子、上條恒彦、加川良、金延幸子、かまやつひろし (ムッシュかまやつ)、カルメンマキ、ガロ、クライマックス、斉藤哲夫、ザディランⅡ、ジャックス、杉田二郎、ソルティ・シュガー、高田渡、田楽座、友

部正人、中川五郎、なぎら健壺、のこいのこ、はしだのりひこ、長谷川きよし、はっぴいえんど (細野晴臣、大滝詠一、鈴木茂、松本隆)、日野皓正、本田路津子、ブルースクリエーション、三上寛、ミッキーカーチス、村上律、村岡実とニューディメンション、安田南、山平和彦、山本コウタロー、吉田拓郎、六文銭などの錚錚たるメンバー。例えば第3回フォークジャンボリーの初日は午後2時に始まり終演の吉田拓郎、六文銭、岡林信康の演奏は深夜1時に開始され、二日目は山本コウタローの演奏にはじまり終演の開始されるのは深夜12時。二日間の昼夜を通した野外コンサートであった。



第1回フォークジャンボリー ポスター (1969年)
JR坂下駅で

Jポップ、Cポップ、Kポップの起源

1969年から1971年にかけて計3回、岐阜県の椈の湖で行われた全日本フォークジャンボリーは通称「中津川フォークジャンボリー」と呼ばれ、Jポップの起源とされている。1960年代にアメリカから流入したフォークソングは、日本の労働運動、反戦運動と結びつき、特に学生運動の場で、学生たちが全員でフォークソングを歌って反戦を訴え、ギター一つで歌うフォークシンガーのゲリラコンサートに群がった。その代表格が岡林信康や高石ともやなどの「関西フォーク」と呼ばれるフォークシンガーたちであり、特に「フォークの神様」と呼ばれた岡林

信康の「友よ」などの歌は学生運動の象徴的な歌となった。

一方、このフォークジャンボリーには、関西フォークの流れに属さない新人のフォークシンガーも多数集まり、代表格は後に井上陽水、泉谷しげるとともにフォーライフレコードを設立した吉田拓郎、小室等であった。彼らの歌は反戦運動を歌った関西フォークと違って、個人の感情や恋愛を描いたフォークソングであった。岡林信康率いる関西フォーク（西軍）と東京で音楽活動をする新人の吉田拓郎たち（東軍）が岐阜県中津川の柵の湖で、3回にわたり野外コンサートで音楽的な手腕を競った（フォークソングの関ヶ原）。例えば「戦争を知らない子どもたち」の作詞で知られる北山修が参加した時のことを述懐し、「フォークジャンボリーでは観客からステージに、怒号と物が次々と投げ込まれ、怖かった」と新聞紙上で述べている。コンサートは野外コンサートであったため、ステージと観客席には境がなく、観客に支持されないアーティストは演奏の途中であっても観客からヤジが飛び、演奏が中断された。コンサート当日に観客から圧倒的な支持を受けたのは、岡林信康ではなく、吉田拓郎であった。

1969年から3年間行われたフォークジャンボリーでは、日本のフォークソングの主流は学生が連帯して歌う反戦歌から個人が歌う叙情歌へと変化したといわれている。1960年代まで政治性を帯びていた日本のフォークソングが、フォークジャンボリーを契機に1970～80年代に個人の感情を歌うフォークソングやニューミュージックに生まれ変わった。政治性がなくなった日本のポップスは、東アジア各国の若者の心をつかみ、「Jポップ」と呼ばれるようになった。中国では70年代に、中国政府により、ゴダイゴやアリスらのJポップグループの中国初のコンサート（78年北京工人体育館）が許可され、谷村新司の「昴（すばる）」が中国で大ヒットしたのを契機に、Jポップは中国各地で

流行をみた。鄧麗君（テレサテン）らの歌姫、崔建（ツイ・ジエン）らのロックミュージシャンを生み、1980年～90年代に「Cポップ」が生まれた。また韓国では1980～90年代にJポップの影響を受けた「ソテジワアイドル」などにより「Kポップ」が生まれた。1998年10月に日本の大衆文化が解禁され、韓国政府により、沢知恵（さわともえ）、金蓮子（キムヨンジャ）らによるJポップの韓国初のコンサートが許可された。2002年に日韓ワールドカップが開催された時に、Jポップの影響を受けた東方神起などの韓国アーティストがデビューし、「韓流ブーム」が生まれた。

2022年、「走れコウタロー」を歌った山本コウタローが亡くなり、「結婚しようよ」を歌った吉田拓郎が引退を表明した。柵の湖にはフォークジャンボリーの記念碑が立てられた。アジアのポップスに興味のある方は、JR坂下駅前の「喫茶マザーグース」やフォークジャンボリー資料館で、50年前のフォークソングの話を聞いていただきたいと思います。



柵の湖畔に立つフォークジャンボリーの碑
(2022年)



音を楽しむ環境 —日本の学校の音楽教育—

経営学部 山川 法子

皆さんは、音楽は好きですか？ ポップス、ロック、ジャズ、クラシック……。街中を歩いているだけでも、店内放送や路上ライブ、宣伝カー、誰かの鼻歌などなど、いろんなジャンルのいろんな音楽が耳に入ってきます。雰囲気作りや、場面に合わせて（合っていないことも？）、あるいは注目して欲しくて流されたり、自分の気分が良いからつい口にしたりと、生活をしていると何かしらの音楽と触れ合っていますよね。

さて、この音楽。学校の音楽の授業では、どう扱われているでしょう？ 私は、教職担当の教員なので、日本の学校における音楽教育について、少し書いてみようと思います。でも、音楽教育は専門外なので、難しいことは置いておいて。皆さんが小学生から高校生までの間に、音楽の時間はどんなことをしていたっけ？ということを出しながら、気軽に読んでもらえたらと思います。

私は皆さんと同じ大学生の頃、教員免許の取得のために、小学校へ教育実習に行きました。小学校の教員というのは、全教科の授業を担当できなければならないので、教育実習中には様々な教科の授業を経験させてもらえました。その中でも印象に残った教科が“音楽”です。音楽教師から「何でも自由にして良いよ！」と言ってもらえたので、ポップスとか聞かせちゃおうか！とも思ったのですが、自重して、あるJ-POPミュージシャンが選り抜いた楽曲が並んだクラシック・オムニバスCDを使うことにしました。子ども達も知っているバッハやチャイコフスキー、メンデルスゾーンなどの著名な作曲

家の、きつと一度は聞いたことがあるだろう作品たちが入っていました。授業の始めに「きつと聞いたことがあると思うよ。まずは聞いてみて。」と一曲を流してみました。聞き始めて少しすると、曲に乗って身体を少し揺らしていた男の子の一人が「先生、踊っても良い？」と、うずうずした様子で尋ねてきたので、「いいよ、前においで。」と手招きすると、更にもう一人が「僕も！」と、一緒に前に出てきて、ちょっとごちないものの、気持ち良さそうに全身を大きく使って表現しました。これはハブニングでしたが、この授業のねらいには、「どこかで聞いたことがある（例えば、運動会や給食の放送の時間など）クラシック曲を聞いて、親しみを感じて楽しむ」というのもあったので、しっかり楽しんでくれて、私にとっては嬉しい誤算でした。でも、ここからが大変です。高学年のクラスだったので、女の子達は冷やかな目で二人を見ながら「ふざけてる……」と言い出したんです。

きつと、女の子達は、〈授業は、きちんと座って真面目に受けるもの〉として、身に付いているのだらうと思えた瞬間です。学校の教科の一つとしての“音楽”では、音楽に関する知識や演奏などの技術を身に付けたり、理論を知ったりするのも大切な内容です。でも、〈“音”を“楽”しむ〉ということが基本にあってこそ、だと思うのです。学習指導要領という、文部科学省が定めた教科カリキュラムの基準を示したのものにも、“音楽”は「味わって聴く」「楽しさを体験して親しむ」とあり、それらを通して「豊かな情操を培う」のが目標と記されています。

私は、「いやいや！自由に踊るのも良いんだよ！」とフォローしつつ、感想を言い合うでも、じっくり耳を傾けるでも良いので、自分の好きな方法で音楽を聴くよう伝え、クラスの皆で身体を動かす時間をとったりして、クラス全体で楽しむ方へ向くように促してみました。張り詰めていた空気も、皆がそれぞれに動いていくうちに徐々に和らいで、なんとか女の子達にも笑

顔が出るようになりました。

女の子達からの言葉も意に介さず、その二人が踊り続けてくれたこと（たぶん普段から“お調子者”と思われるのだろうと推し測れました）は、〈楽しむ〉ということを途切れさせない時間・空間を作り出すことに大いに貢献してくれました。

ところで、学校の音楽室って、どんな部屋だったか覚えていますか？



学校によくある音楽室

よくある音楽室は、普通の教室のような1人1台の机と椅子があり、ピアノやオルガンなどが設置されていて、黒板は五線譜になっています。そして、作曲家達の肖像画が貼られているところは多いですね。この音楽室、近年は様変わりしているところもあるんです。音楽ホールのように天井が高く、壁も音が心地良く聞こえるような設計に。それに脱みついているよう



音楽ホールのような音楽室
(福井市立 至民中学校)

な作曲家の肖像画も無し！（ある楽器店の調査によると、音楽が嫌いな理由の2位に、音楽室が怖いというのが挙がったそうで、作曲家の肖像画を某有名フリー素材屋のイラストに貼り替えた小学校があるとか。）こんな建築は私立の学校でしょう？と、よく言われるのですが、公立学校にも増えているようですよ。音楽ホールのような見た目や音の響きだったら、“音楽”の時間が楽しくなりそうじゃありませんか？

“音楽”の授業と言えば、私は高校生の頃。芸術の選択科目で“音楽”を履修したのですが、アコースティックギターを毎回、自由に練習させてもらえました。1人1本ずつ使用できたので、こつこつ練習ができて少し演奏できるようになったのが一番の思い出です。今はもう、弦の押さえ方もすっかり忘れてしまいました……。皆さんには、“音楽”の思い出、何かありますか？

出典：

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2010/06/04/1294512_15.pdf



浜松は、楽器の生産地として世界的に知られている。とりわけ、YAMAHA、KAWAIという世界的なピアノ量産メーカーの所在地であり、その源流は江戸時代以来の木工作具の産地であったこと、その職人たちが新しい時代に適応しようとしたことなどに求められる。また、それゆえというべきか、この地は音楽の盛んな地である。一例を挙げれば、若手の登竜門とも言うべき世界的な「浜松国際ピアノコンクール」が毎年開催されている。その水準は、2000年第2位の上原彩子は2002年チャイコフスキー国際コンクール優勝、最近では2018年2位の牛田智大が昨年のショパンコンクールでは2次予選まで行くなど、めざましいものがある。



そうした浜松に「楽器博物館」がある。駅ピアノのある浜松駅北口を出て、右に折れて3分ほど歩くだけという、極めて便のよい立地である。途中、コンクールの会場ともなるホールを持つアクティシティがある。道々、音楽関係のモニュメントや演奏会のポスターもあり、楽しい気分になってくる。博物館は1995年4月に設立

されたもので、国内唯一の公立楽器博物館であり、クラシック音楽に関係するヨーロッパに由来する各種の楽器はもとより、世界各地の民族楽器が、触れて演奏できるようになっているものも含め3300点（博物館HPより）以上展示されている。要するに、音が出るものは楽器、という単純明快なコンセプトが根柢にあるように感じられる。当然の事ながら、平均律を中核にする西洋古典音楽の背後にある幅広い世界が展示され、体験できるのである。



特に興味深いのは、浜松という土地柄からか、ピアノかもしれない。ここでのピアノ展示は、チェンバロが決してピアノに至る途中経過の、発展途上の楽器ではなく、工芸品としても調度品としても完成度が高いものであることを示している。由来を一にする同根の楽器であるハープも、中央アジアの各種楽器と共に展示がある。

さて、表現者が作曲も演奏も共に行っていた時代、次第に多くの聴衆を前にするようになると、必然的に演奏会場も規模が大きくなり、演奏効果の拡大が求められる。それに伴う鍵盤数の増大がやがて現在の88鍵となる。博物館の展示ピアノからは、19世紀ヨーロッパにおけるピアノの音が、現在の演奏音からほど遠かったことがわかる。例えば、現在では多くのピアニストが愛用するスタインウェイ。これほど工業製品としてのピアノの性格をよく示すものはな

いであろう。特に高音部の突き抜けるような音は、伸びのある中低音部と共にこのメーカーの特徴と言ってよいであろう。しかし、ショパンのころスタインウェイは生まれたばかりであった。博物館には、彼が愛用したプレイエルが展示されている。スタインウェイと異なりややぐもった丸い音だが、粒はそろっている。ノクターンなどは夕霞を表現できるプレイエルに軍配が上がるのかもしれない。

スタインウェイはもともとアメリカという新興工業国で産声を上げ、後にドイツにも進出した。この間、音楽の大衆化という時代に直面し、自動演奏装置を組み込むことによって自宅での名人芸の再現を可能とした。再現芸術ということになるとベンヤミンの論考が想起されるが、それ以前のことである。ここに展示されているスタインウェイの自動演奏ピアノは、まず演奏家が音を出す時のピアノのアクションの動きを利用して、紙シートに穴を空け、それをロールにして記録する。再演するときはそのロールを動かして穴に空気を送ってハンマーを動かす、というのが基本的な仕組みである。まさしくアナログであるが、それがフルにピアノが弾けない一般の愛好家の望みだった。いつの時代でも、目の前で本物（にできるだけ近い）演奏を聴きたいという思いに、違いはない。

博物館のもう一つの特徴は、「民族楽器」の展示であろう。とりわけバリのガムランに関するものが充実している。もちろん、オランダによる植民地時代に手を加えられたものであり、元の姿からはほど遠いのであろうが、楽器の美しさ、洗練された様態には、観光化されたものであっても、「西洋音楽」とは異なったリズムや音階、和声を持つ音楽の独自性を見ることができ。打楽器類の豊富さには、眼を見張るものがある。人間が初めて音楽を意識した時、音が出るもの、つまり楽器として自分の身体、近くの石や棒きれ、動物の骨などがあったはずである。工業化以前の社会では、そうした身体楽器、

自然打楽器が豊富にあった。旋律楽器もそうである。打楽器を組み合わせで旋律を奏で、1本の弦で音程を作る。形態は様々でありながら、よく見ると同じ構造のものにしばしば出くわすのも、この博物館のおもしろさであろう。



音楽は自分の趣味であり、また生き甲斐にもなっている。とりわけ、チェロは中学校の音楽準備室に布ケースに入って転がっていたこともあり、それ以来の友である。高校3年の時、「第9」をやったことが決定打となった。たいしてうまく弾けるわけではないし、学生の頃も真面目にレッスンに通った、というわけではない。それでも、名古屋に来て暫くして地元のアマオケに参加し、最近までずっと隅っこで演奏してきた。単純に、楽しかった。共通科目で「音楽と人間」なる科目を担当し、主にクラシック音楽の歴史を西洋近世・近代史のなかで論じて来た。その中で、音楽とそれが存在する社会は深く関わり合っていること、ジャンルが違ってても音楽は音楽であることなど、あまりアカデミックではないことも話してきた。少しでも音楽に興味を持ってもらえれば、と思ったからである。以前から興味があったこともあり、この文章を書くことを引き受けたが、特集の趣旨からはほど遠いものになっているのかもしれない。しかしながら、どこかひとところからでも関心が始まれば良いのではないかと念じて短文を終わりにしたい。

名古屋

語学教育研究室より



名古屋キャンパス厚生棟4階の語学教育研究室には、
学生のみなさんに貸出可能な書籍もあります。

主に語学検定の対策用の書籍で、一度に3冊まで15日間、貸し
出しています。返却日前に借りている書籍を語学教育研究室に持参
のうえ手続きをすれば、延長して借りることもできます。

以前から置いている フランス語・ドイツ語 は最新版(2022年度
版)の試験対策本を、また、新たに配架された英語の書籍はTOEIC、
TOEFL、IELTS、英検の対策本をラインアップしています。



複数冊用意している書籍も多いので
「借りたい本が図書館にあると思ったら
他の人に貸出中で借りられなかった！」
という時は、是非見に来てください。



語研のドアから入って左の棚

2022年度第28回外国語コンテスト 開催

11月から12月にかけて、各語学の部門
別に語学教育研究室主催の外国語コン
テストが開催されました。

各部門のコンテストの様子や結果発表
は次号に掲載します☆

表彰式・発表会

12月22日(木) 12:30～

図書館ディスカッションルーム

第8回

愛知大学 語学教育研究室 公開講演会

2022年12月3日(土) オンライン開催

徳島大学 社会総合科学科の山口博史先生に

「出発はフランス、現在地はベルギー」

をご講演いただきました。

講演の紹介は次号掲載予定です。山口
先生がベルギー研究について「対話型講
演」で楽しくお話くださった様子をお伝え
します。



Toyohashi Language Center
Come on join us !



ランゲージセンターによこそ!

豊橋キャンパス 3 号館 1 階にはランゲージセンターがあります。

ランゲージセンターは『語学をいろいろな方法で楽しく学ぶサポートをする場所』です。

★ ランゲージセンター

外国語に関する本や雑誌、検定試験の対策本、様々な言語の DVD など沢山の資料が揃えられたスペースです。貸出対応もしているので、書籍は 2 冊まで 2 週間借りられます。

とてもゆったりとしたアットホームな空間です。資料閲覧や自習等、自由に利用してください。

※DVD や一部資料は除きます。

★ LL メディアスペース

センター内にある DVD 等を視聴できる場所です。

個人ブースになっているので自分のペースでゆっくりと観られます。

映画を観る事はリスニングスキルだけでなく、字幕を有効活用してリーディングスキルの向上にもおススメです。

★ Language Café

【English Café / Café Français】 / 【Global Café : 723 教室】

スピーキング力を伸ばしたい方、異文化交流に興味のある方はぜひご参加ください!

ランゲージセンターでは、ネイティブの先生や留学生と交流ができる café を用意しています!

どなたでも参加できるので、活きたコミュニケーション力をここで培いましょう。

★Language café の詳細に関してはランゲージセンター入口付近の掲示板等にてお知らせしています。

※新型コロナウイルス感染症に係る愛知大学活動制限指針に基づき、利用を制限している場合があります。【愛知大学 語学教育研究室】のホームページにて開催情報等確認してください。



豊橋キャンパス3号館 1 階
※冬休み期間中に【梢風館】に引越します!
詳細はLive Campus等でお知らせいたします

2022年度 外国語検定試験奨励金のご案内

言語	名古屋校舎		豊橋校舎	
	試験名称	基準	試験名称	基準
英語	実用英語技能検定（英検）	準1級以上	実用英語技能検定（英検）	2級以上
	TOEIC Listening & Reading Test ☆	650点以上	TOEIC	530点以上
	TOEIC Speaking & Writing Tests ☆	130点以上	TOEIC IP	① 750点以上 ② 前年比100点以上
	TOEFL iBT	50点以上	TOEFL iBT	50点以上
	IELTS	4以上		
	国際連合公用語英語検定(国連英検)	B級以上		
	ビジネス通訳検定（TOBIS）	3級以上		
	日商ビジネス英語検定	3級以上		
	通訳案内士（通訳ガイド）	合格		
ドイツ語	ドイツ語技能検定（独検）	4級以上	ドイツ語技能検定（独検）	4級以上
フランス語	実用フランス語技能検定（仏検）	4級以上	実用フランス語技能検定（仏検）	4級以上
	DELTA・DALF	A1以上	DELTA・DALF	A1以上
	TCF	100点以上	TCF	100点以上
中国語 ☆	中国語検定	4級以上	中国語検定	4級以上
	HSK	3級以上	HSK	3級以上
ロシア語	ロシア語能力検定	4級以上	ロシア語能力検定	4級以上
韓国・朝鮮語	ハングル能力検定	4級以上	ハングル能力検定	4級以上
	韓国語能力（TOPIK）	2級以上	韓国語能力（TOPIK）	2級以上
タイ語	実用タイ語検定	4級以上		
日本語	日本語能力（JLPT）	N1級	日本語能力（JLPT）	N1級
	BJTビジネス日本語能力テスト	460点以上	BJTビジネス日本語能力テスト	460点以上

☆名古屋校舎のTOEICは公開テストのみとなります。 ☆中国語は現代中国学部を除きます。

受付期間 名古屋校舎 2023年1月31日まで

豊橋校舎 2022年12月1日～2023年2月17日

詳細は所属校舎の語学教育研究室にて確認してください。

奨励対象者 学部学生・短大生（協定留学生・大学院生・科目等履修生は除きます）

〈編集後記〉

今号は「世界の音楽と楽器」というテーマで西洋、東洋各国のクラシック、ポップスについての様々な記事をご提供いただき、ありがとうございました。ナイジェリア、ドイツ、日本の音楽事情をみると、音楽ではYouTubeなどの普及により、国境のないボーダーレス化が進み、一方で男女の差のないジェンダーレスが一般化していると感じました。三好章先生の「ジャンルが違ってても音楽は音楽である」という言葉を引用させていただき、お礼の言葉といたします。

Lingua20号編集委員会（藤森 猛、島田 了、高村めぐみ、下村 武）